

## プロローグ

あれ？　ここはどこだろう……？

わあ、風船持って浮かんでる！

あれ？　下の方は白い？……雲だ！　僕、雲より高い所にいるんだ。

ゆっくり雲に近づいていく……雲のすぐ上に来たとき、ふんわりと雲の上に立てるかなと思ったけど、やっぱりそんなことはできなくて僕は雲の中に沈んでいく。

まっしろで何も見えない……。

雲の中は少しひんやりとして、全身が雨よりもずっと細かい水の粒に覆われているのを感じた。

……と、さーつと視界が開けて、僕の足の下が急にクリアになった。くつきりと景色が見える。雲を抜けたのか、はるか下に海が見える。

波が、お日さまとおしゃべりしているようにキラキラ光って愉しげだ。風船につかまったらま僕は「おーっ」と叫んで、やたら嬉しくなった。海と山に囲まれた小さい町が見えてきた。やわらかい風を感じる。

風に押されるように僕は陸地に向かって下りているとわかった。

おもちゃみたいにたくさん並んでいる家々、その間をやっぱりおもちゃのような馬車が行き交っている。僕は風船のひもを握りしめたまま、その町のはるか上空を越えて山の方に流されている。

山は濃い緑、薄い緑の葉っぱをまとった木々が時折その枝先を揺らし、僕を見上げているようだった。僕は風船につかまったらま、その木々の上をかすめてさらに飛んでいく。鹿のような動物が親子で僕を見上げているのが見えた。

何かの鳥の群れとすれ違う。

鳥はいつもこういう景色を見ているんだな。

しばらく景色を見るのを忘れて鳥を見送っていたら気付いた。

いつの間にか高い木の梢に片足を預けて空中に停止していたのだ！

「なんだい、中途半端なサーカスみたいだな」

自分の一人ごとにちよつと笑つて、引つかかっていた左足を枝からはずすと、体はまたゆつくりと降下を始めた。

だんだん地面がせまってきた。

「よおーつと」

僕はふんわり無事に着地。

すると今まで僕と一緒に下りてきた風船が「それじゃ」とでも言うように少し左右に揺れながら、下りてきたときと同じスピードで空へ上がっていった。

